<研究ノート>中国における林芙美子の翻訳状況（戦前・戦時）：附：「翻訳作品一覧表」「訳文掲載誌の基本情報一覧表」

著者	鄒 双双, 野田 敦子
雑誌名	日本研究
巻	60
ページ	193-219
発行年	2020-03-31
その他の言語のタイトル	Translations of Hayashi Fumiko in China Before and During the Second Sino-Japanese War
URL	http://doi.org/10.15055/00007460

研究ノート

中国における林芙美子の翻訳状況（戦前・戦時）

附：「翻訳作品一覧表」「訳文掲載誌の基本情報一覧表」

鄒　双双
野田敦子

一　はじめに

林芙美子は、改造社の「新鋭文学叢書」の一冊として刊行された『放浪記』（改造社、一九三〇年七月）で本格的なデビューを果たしたが、印税で向かった先は中国であった。[1] その後、林芙美子は戦前から戦時下において後述するように中国と深い関係を持ち、作品も中国で翻訳されるようになる。

しかしながら、戦前と戦時下における林芙美子の翻訳状況を、全体的に見渡す調査は未だなされていない。たとえば、陳亜雪「林芙美子の南京視察旅行」（『内海文化研究紀要』四二号、二〇一四年三月）においては、王勁松が指摘した[2]中国語翻訳作品「運命之旅」が紹介されているが、この一点にとどまっている。また、本稿の筆者のひとりである鄒双双による「日本占領期（1937―1945年）の北京における日本文学の翻訳」（『東アジア文化交渉研究』一〇号、二〇一七年三月）は、日本占領期の北京における日本文学の翻訳状況についてまとめ、『東亜聯盟』に組まれた「林芙美子特輯」を提示したものの、掲載された三作品の原作名を突き止めるまでには至らなかった。[3]

中国における先行論としては、萬珺「林芙美子的作品在中國的接受（中国における林芙美子作品の受容）」（華中師範大学修士論文、二〇一七年）が挙げられる。同論は林芙美子が中国文学に与えた影響を論じる前提として、第一章で二〇一七年までに出版された中国語訳書をリスト化したうえで、一九三〇年代、八〇年代および

二〇一〇年代は訳作が比較的多く出た時期だとしている。また、三〇年代に林芙美子作品が中国で盛んに訳され、とりわけ『放浪記』が注目された要因として、二〇、三〇年代における日本の「プロレタリア文学運動」が中国に大きな反響をまき起こしたという点を指摘している。だが、三〇年代に多く訳された背景には後述のとおり「プロレタリア文学運動」以外の側面もあり、また同論は雑誌掲載の訳文を視野に入れていないうえ、訳書の書誌情報においても訂正すべき箇所があることが、今回の調査で明らかとなった。このように翻訳状況を俯瞰できる調査は徹底してなされていない。

今回の調査をするにあたっては、王向遠の『日本文學漢譯史』（王向遠著作集第三巻、銀川：寧夏人民出版社、二〇〇七年）を参照し、中国のデータベース「全國報刊索引」と「大成老舊刊全文數據庫」を用いた。[4] そして検索結果の一点一点における原作とその初出を照査した。原作の初出誌の調査にあたっては、『近代文学研究叢書　第六九巻』（昭和女子大学近代文学研究室編、一九九五年三月）所収の平井法編「二　著作年表」を基礎資料として用いた。調査結果は本稿に付した「翻訳作品一覧表」にまとめているが、林芙美子作品の翻訳集（書籍）は四点確認でき、[5] 雑誌掲載の総数は五十三点であった。[6]

比較のため、同時代における他の女性作家の翻訳点数を掲示すると次のとおりである。王の前掲書によれば、書籍では平林たい子の訳書が三点あり、佐多（窪川、以下「佐多」表記で統一）稲子の訳書は一点のみである。書籍だけを見ても林芙美子は、平林たい子や佐多稲子より多く四点を確認したが、雑誌掲載の点数においては以下のとおり格段の差があった。

雑誌の点数を「全國報刊索引」と「大成老舊刊全文數據庫」を用いて調べた結果、平林たい子は計五点を確認し、[7] 佐多稲子においては「插話」などの計六点が認められた。[8]「插話」は、『婦女雑志』の「日本女性作家作品特輯」において翻訳・紹介されたが、この特集には先の「運命之旅」も掲載されている。同特集で取り上げられた他の女性作家は岡本かの子と中本たか子であった。彼女らの翻訳点数をみると、岡本かの子は二点であり、中本たか子は一点のみであった。[9] こうした他の作家の状況を鑑みると、点数の多い林芙美子について明らかにすることは、往時の女性作家の翻訳状況を解明するためにも必須である。

また一連の調査により、知られてこなかった「古都雑寫：北平之秋」を確認したほか、翻訳を通じた林芙美子と崔萬秋、曾今可、陶志誠との交流や、『林芙美子全集　第一六巻』（文泉堂出版、一九七七年四月）所収の今川英子編「年譜」に対して、今後考察すべき点も判明した。崔萬秋と曾今可との交流については、中国語版『放浪記』が刊行されるきっかけとなったものであり見落とせ

ない。本稿ではこれらを中国側の資料を主に用いて紹介したい。

二　中国語版『放浪記』と崔萬秋、曾今可

林芙美子作品の翻訳がされ始めたのは一九三一年であった。六点確認でき三〇年代前半において最も点数が多く、三一年に訳されたのはいずれも「放浪記」である。本節では「放浪記」の翻訳者・編集者と林芙美子の交流を中心に紹介したい。

日本において「放浪記」は、一九二八年一〇月から『女人藝術』に発表され好評を得た。そして三〇年七月に改造社より『放浪記』が発行されたが、同年一一月には『続放浪記』も「新鋭文学叢書」として刊行された。「六十万部位うれた[10]」とされているように、『放浪記』はベストセラーとなった。『放浪記』について同時代の板垣直子は「全巻詩的雰囲気に包まれてゐる（略）それぐ〳〵に味ひがある」とし、ハイネや啄木、アミエルを思わせるなどと高く評価したが[11]、中国における訳書は四点中三点が『放浪記』であったのである。

まず一九三二年元日に新時代書局が、雑誌に翻訳掲載された「放浪記」をまとめて「新時代文藝叢書」の一冊として発行し、三七年には啓明書局が「世界文學名著」の一冊として『放浪記：足本』を刊行した。さらに『放浪記：足本』は二年後の三九年、日中戦争の最中にもかかわらず再版された。四四年には「翻訳文芸の中では『放浪記』が「洛陽紙貴〔洛陽の紙が高くなった〕」というほど売れている[12]」と言及されるほどであったが、雑誌から書籍に至るまでの訳者が崔萬秋であった。

崔萬秋は三二年版『放浪記』の「序」に、「われわれはこの血と涙の抒情詩を読んで、現代日本社会制度下でもがく女性に同情の涙をこぼさずにはいられない。同時に、その奔放自由な生活、颯爽明快な性格を大いに愉快に思う。その清々しくて明るい文章に感動してやまない。『放浪記』を東方の女ジプシーと評する人がいるが、その通りではないだろうか。[13]」とし、三九年版においても「僕はこの作品を愛する。イサドラ・ダンカンを愛するほど愛するから訳したのだ」と示し[14]、一貫して称える言葉を惜しまなかった。中国語版『放浪記』の誕生は、崔萬秋の尽力にほかならなかったが、以下に見出せる林芙美子本人から得た信頼も見過ごしてはならない。

崔萬秋は林芙美子と同じ一九〇三年生まれであり、二四年から日本に留学し三三年に帰国したが、「日本女作家訪問記[15]」と「東京交游記[16]」からわかるように、日本滞在の十年間は多くの日本人作家と交遊し文学作品を訳した[17]。崔萬秋が林芙美子から得た信頼は三二年版の『放浪記』から見て取れる。扉を開くと林芙美子の肉筆サイン入りの近影が掲示され、次頁には崔に寄せた林芙美子の

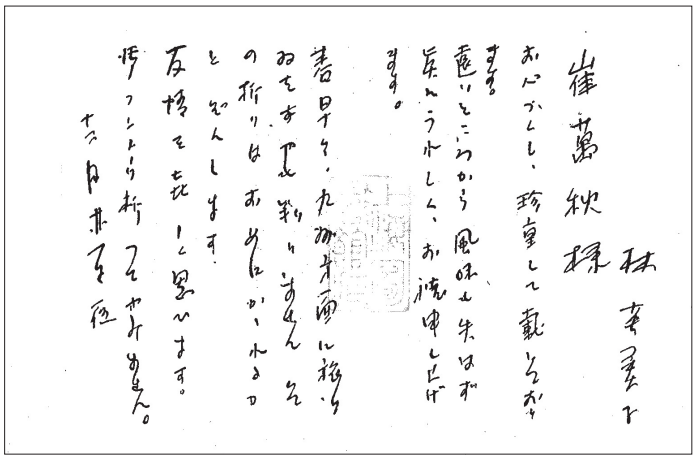

図１　崔萬秋宛て林芙美子の書簡

私信（図１）が掲げられている。[18]

書簡の本文には以下のとおりある。

お心づくし、珍重して戴いており／ます。
遠いところから風味も失はず／眞にうれしく、お禮申し上げ／ます。
春早々、九州方面に旅して／ゐますやも判りません　そ／の
折りはおめにかゝれるか／と　ぞんします。
友情を𢘅〔喜〕しく思ひます。
御フントウ祈つてやみません。
十二月廿一日夜

一九三〇年末に、崔萬秋は何かの贈り物を林芙美子にして、後述のとおり「放浪記」の書籍化に関して相談したところ、この返信をもらったことがわかる。

続く頁に「放浪記譯序」があり、これは二部構成となっている。前半は受取人が書かれていないが、文脈から『新時代』の編集責任者である曾今可宛てと推定される崔萬秋の書簡であり、日付は「五月二十六日」となっている。後半は崔萬秋が曾今可と表紙絵を描いた孫福熙に感謝の言葉を述べたもので、文末に「十二月二十日に上海にて追記」とあり、崔が一時帰国した際に書いたものだとわかる。やや長いが、曾今可に宛てた崔萬秋の書簡を、訳して紹介したい。書簡からは、曾今可の出版協力に加えて、林芙美子に対する評価や、郁達夫が林芙美子に渡したとされる歌、林芙美子が崔萬秋に送った短歌についても知ることができるのである。

早く林芙美子の傑作放浪記を訳して同好に饗しなさいとの

ご期待、承知いたしました。ご厚意に深く感銘いたしました。〔略〕兄さんがかわりに書局に働きかけて出版できれば、ほんの少しでも同好の期待に応えられるのではないでしょうか。

林芙美子はまだ国内では知られていませんが、彼女は暑い夏の中、中国を遊歴し、ハルビン、奉天、大連、青島を経て上海に来訪し、郁達夫、田漢、鄭伯奇諸君と交遊していました。日本留学出身の文壇人はたいてい彼女を知っているはずです。先月、僕が尾道に彼女を訪問したとき、彼女は、郁君にもらった歌を書いて見せてくれました。

一騎紅塵妃子笑〔一騎の紅塵に妃子笑み〕
無人知是荔枝來〔人の是荔枝の来たるを知る無し〕

〔略〕

先月、彼女は墓参りで帰省したとき、郷里の新聞社に招かれて文芸講演会をしました。僕がいた広島から尾道まで列車で二時間なので、日曜の暇を利用して訪問し歓談しました。夕飯をご馳走してくださり、さらに写真一枚と「飛翔鷲心亦寂寞〔飛翔する鷲も心寂しい〕」という短歌をくださいました。[19]

（傍線は引用者）

引用しなかったが書簡には、崔萬秋が一九三一年五月の時点で「放浪記」六編を訳し終えたことも記されている。同年七月を皮切りに「放浪記」訳が次々と三誌に発表されるが、その半年後、書籍として出版されたのは曾今可の助力があってのことだった。さらに書簡には崔萬秋が林芙美子から「写真一枚」をもらったとある。それが『放浪記』の扉に掲げられた写真だろう。また書簡の日付は「五月二十六日」であったが、本文に「先月」とあるため崔萬秋が林芙美子を訪問したのは三一年四月であることもわかる。訪問のタイミングについては、前掲の崔萬秋宛の林芙美子書簡に「春早々、九州方面に旅してゐますやも」とあることから、この曾今可宛て崔萬秋書簡に見受けられる、尾道への帰省時であったと推定できる。実際、林芙美子は三一年四月に尾道で井伏鱒二らとともに講演会を開催しており、また林芙美子との面会については、崔萬秋自身が後年に記した「「放浪記」のことなど」に次のとおり示されている。「その時私は広島文理科大学に在学中で、林さんの「放浪記」を断片的に翻訳して上海の「現代」という雑誌に連載したところ大変歓迎された。単行本にするため原作者の写真とサインを貰ってくれと頼まれ、その旨東京の林さんに連絡をしたところ、折返し近々故郷尾道に講演に行くから広島にも近いゆえ、そこでお会いしたいということだった。[20]」と述懐されている。崔萬秋は尾道へ行き、林芙美子を訪ねていたのである。

一九三一年の尾道での面会は初対面であり、『放浪記』の翻訳によって始まった交流であった。三二年七月、崔萬秋が東京を訪れ

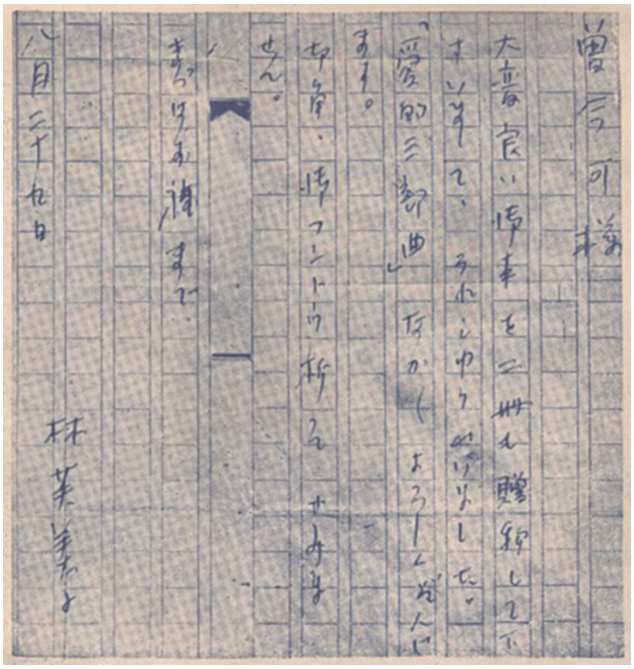

図２　曾今可宛て林芙美子の書簡

た際に二人は再会する。[21] 戦後においても四七年、崔萬秋が台湾記者訪日団員として日本を再訪したときに再会している。『放浪記』で結ばれた二人の友誼は戦後に続いていたのである。その後の四八年にも、崔萬秋が台湾駐日代表団に勤務し、東京に滞在することになったのを機に、二人は頻繁に会い一緒に出かけたり、文壇や作品について話をしたりしたという。[22]

他方、三二年版『放浪記』に掲載の林芙美子の写真は、曾今可編集の『新時代』（一九三三年第三巻第五／六期）に掲載されたものでもあり、さらに同頁には、曾今可宛ての林芙美子書簡（図２）が紹介されている。[23]

書簡には「曽今可様／大変良い御本を二冊も贈物して下／さいまして、うれしゆうございました。／「愛的三部曲」なかくよろしくぞんじ／ます。／折角、御フントウ祈つてやみま／せん。／まづはお禮まで。／林芙美子／八月二十九日」と記されている。しかし三九年、曾今可は日本の従軍ペン部隊を罵倒する「無恥的従軍部隊〔恥を知らない従軍部隊〕」[24]を発表し、ペン部隊の一員であった林芙美子にも容赦しなかった。戦争が要因となり、曾今可と林芙美子との友好的な交流は絶たれたのである。

曾今可の協力を得られなくなってからも『放浪記』は、版元を変えて一九三七年と三九年に二度発行されたが、それは崔萬秋の尽力であった。崔萬秋については、洛神によって「崔萬秋と言えば林芙美子を思い浮かべ、林芙美子と言えば崔萬秋を思い浮かべる。林芙美子の紹介における崔の貢献は半端ではない」[25]と戦後になって評価されている。崔萬秋は『放浪記』を出すきっかけを作ったのみならず、中国語訳において記憶されるべき訳者でもあったのである。

三　林芙美子像と年譜的事項——日中戦争勃発（一九三七年）まで

本節では「放浪記」訳の掲載以降における林芙美子像と評価をまず紹介する。その後、「年譜」について言及したい。

一九三一年一一月に巴金が発表した小説「霧（續）」には、林芙美子をモデルとする女性作家が次のように描出されている。[26]「あの『放浪記』で知られた若い女性作家〔略〕の半身写真を取り出して見せた。〔略〕表情は確かに信じられないほどの魅力を感じさせる。自分が女性でありながら、その写真にうっとりしてしまう。」と描写され、続いて「下女から日本近代一流の女性作家にたどり着いた彼女の放浪生活」と示されて、一流作家と評価されている。しかし「放浪記」以外の林芙美子の翻訳作品は、三〇年代前半では三四年と三五年に短編などが計三点掲載されたに過ぎない。「放浪記」に先駆けて平林たい子や佐多稲子の訳作が二九年から掲載されていたことに比べると、三〇年代前半の林芙美子は「放浪記」以外の評価は、さほど高くはなかった。

たとえば、一九三一年に朱雲影が「女性作家的近況」[27]において、近年の著名作家として野上弥生子や三宅やす子、中条百合子、宇野千代、平林たい子、ささきふさを挙げ、次いで中本たか子、佐多稲子、林芙美子の名を示しているが、佐多稲子を最も活躍している作家としており、林芙美子に対する叙述は見受けられない。三四年に竹中繁が発表した「日本的幾個女作家」[28]においても、佐多稲子は人気作家の一人であるとされているのに対して、林芙美子は取り上げられてすらいない。しかしながら林芙美子の訳作は三〇年代後半の三六年には八点も確認できる。三六年の一年間だけで平林たい子と佐多稲子における雑誌掲載の総数を超越しており、この前後から林芙美子の評価が変化したことがわかる。

たとえば三六年に発表された曼之の「一年来的日本女作家（日本通信）」は、林芙美子を野上弥生子と宇野千代とともにブルジョア派に入れ、林芙美子については「抒情主義から文学観察へ転換しようと努力する痕跡が窺え、とりわけ「牡蠣」が文壇から好評を得ている」と評している。[29]他方、同年に発表された宋雯芳の「現代日本文壇上的女作家」においても林芙美子は、野上弥生子や宇野千代、円地文子などとともにブルジョア文学の作家とされている。[30]

三六年には、自伝とされる「林芙美子的自傳」や「我的二十歳時代」が、短編「一堆垃圾」と初連載「小説：市立女學校」とともに掲載された。三〇年代前半は、三一年に「放浪記」、三四年と三五年には短編などが掲載されるにとどまっていたが、三六年には〈林芙美子〉がどういう人生を送ってきたのかを示す自伝的作

品が掲載され、初めて連載もされている。このような翻訳状況から三六年はターニングポイントだったということがわかる。

林芙美子は一九三六年に中国を訪問しており、初訪問した北京[31]では陶志誠訳の「古都雑寫：北平之秋」が『實報半月刊』に掲載された。「北平之秋」は『林芙美子全集』に未収録であるため全文訳を掲示しておきたい。

北平に来てから、ここはどうだとよく友人に聞かれるが、来てからまだ十日も経っていないから、目で捉えて感じた北平はたぶんほかの一般観光客とあまり変わらないだろう。

私は、不変で停滞している風景は、あまり好きではない。故宮を見たし、天壇も見たが、これらは、一度見れば十分だろう。私が好きなのは北平の秋だ。北平の秋は、時とともに移り変わり、活気があって幽玄かつ不思議であり、霊的なものである。

私は、西山の古き楓、秋蟬の鳴き声、陶然亭畔の白蘆ばかりの、寒々として寂しい塚、景山の夕日、萬牲園の荒廃した小道などを訪ねてみた。これらはいずれも秋の趣に満ち、詩的情緒に溢れていた。市街の朝や胡同の清らかな夜、大車輪の転がる音、夜の屋台の客引きの声も北平の秋の風物である。駱駝たちが行列になって朝日や夕日を浴びながら、ゆっくりと目の前を通り過ぎていくとき、これが北平の秋の健やかで確かな景色だと思った。

秋は古城にあり。秋の情緒がしみじみと感じられ、古城も秋によって鮮やかに際立つ。だから北平は秋に限る。ありとあらゆるものが、しだいに変わり、動きがあって、幽玄で不思議になり、いたるところでインスピレーションを受ける。

それゆえ、私は北平が好きだ。北平に心を奪われてしまった。

北平は東亜の文化城だ。私はここでもっと多くの文化人と会談したい。まだ若い私たちは、奔流のように前へ突き進まなければならないだろう。

まもなく帰国するが、今後北平のことを思い出すたびに、心の中に秘めたその気持ちで一杯になると信じる。その時、北平がもっと恋しくなるだろう。

——十月四日、大中華民国北平にて

また「北平之秋」本文に付け加えられた訳者の「志誠附記」は、とくに「年譜」に対して、考察すべき点が示されている。以下、「志誠附記」も全文訳を紹介したい。

有名な日本女性作家の林芙美子が、先月北平に来た。一般文

芸界の注目を集めた。林氏の「放浪記」が発表された後、一時世を風靡して、英訳されたり映画化されたりした。最近発表した「野麦の唄」「牡蠣」「面影」「文学的短論」[32]などの傑作は、いずれも日本文壇を震撼させた。今回北平に来たのは、改造社に依頼されて「北京の秋」を書くためだという。先日林氏に会った時に伺った話では、連日廻っていろいろ感じたが、とりわけ北平の秋に引かれて思うところが多いという。この文は、すなわち林氏が二十分で書きあげて、訳者に訳させたのだ。林氏は北平の偉大なる各建築物に対しても賛美の言葉を惜しまなかったが、それはとうてい、生き生きとした風景と大衆の活気ほど魅力的ではないと考えたようだ。林氏は「北平がさらに発展すべきだ」と言い、最後に、北京在住の日本人の生活が日本国内の日本人のとまったく違うところに触れ、これが帰国した後の最もよい執筆題材になる、と語った。これを聞いて、私は沈黙した……（傍線は引用者）[33]

まず傍線部について確認しておきたい。「年譜」には「十月、自費で満州、山海関、北平に遊び」と示されているが、[34]次のとおり「十月」ではなく九月であると考えられる。すでに曾婷婷が、林芙美子は「九月三〇日前後」に北京を訪問したと指摘しているが、[35]本文末に「十月四日、大中華民国北平にて」とあるため、「志誠附記」にある「先月」とは曾の指摘どおり九月のことであり、「年譜」の修正が必要である。

くわえて曾の指摘する「三〇日前後」に林芙美子が来たということについても再考が迫られる。というのは、徐芳「記林芙美子」[36]によると、徐芳は一〇月五日に林芙美子を訪問し、方紀生を介して交流したというが、林芙美子は北京に「十日前に来て、後二日で去る」と話したという。「北平之秋」の「十日も経っていない」と文末の日付「十月四日」をもふまえると、林芙美子の北京滞在期間は、九月二五日あたりから一〇月七、八日頃であったと考えられるのである。

さらに「年譜」では「自費で〔略〕北平に遊び」とされているが、傍線部「改造社に依頼されて「北京の秋」を書くため」を考慮するならば、「自費」についても検討を要する。というのも林芙美子は、三七年一月に「北京紀行」を『改造』（一九巻一号）に発表し、改造社の依頼に応えているからである。そのため改造社が旅費を部分的にでも負担していたと考えられ、「北京紀行」を発表した同号において西安事件（一九三六年一二月）に敏感に反応した改造社[37]と毎日新聞社との関係[38]が、その後、南京陥落（一九三七年一二月）に際し林芙美子が毎日新聞社の特派員として現地に赴くなどの戦争協力に向かう、一つの引き金になったという見方も生じる。[39]このような点から「年譜」の「自費」について検証が必要である。

また、「志誠附記」の終盤は林芙美子の中国観を考えるうえで重要な箇所でもある。

林芙美子の中国観などがうかがえる資料としては、ほかに先行論でその存在のみが紹介されているものに、中華民国二五年（一九三六年）一〇月三日付の『華北日報』記事「北京飯店裏　林芙美子女士訪問記」がある。実はこの紙面には、「北平之秋」に掲載の写真[40]と同じものが見られ、本文には、記者と陶志誠が林芙美子の宿泊先である北京飯店へ行き取材したときのことが以下のとおり綴られている。

> この度北平を訪れるのは、雑誌「改造」の嘱託で「北平之秋[41]」を書くためであるから、名勝地や情緒のあるところを廻らなければならないと言う。〔略〕中日問題に関しては、文芸作家に聞いてもたいした話が出ないだろうから、聞かないことにした。

林芙美子が改造社の嘱託で北京に訪問したということや、二国間の問題についてどう思われていたのかがわかる。しかしながら同資料は無署名の記事であり、従来は「改造社の嘱託」について確証がなかった[42]。「北平之秋」はこの叙述を裏付けるものでもあった。

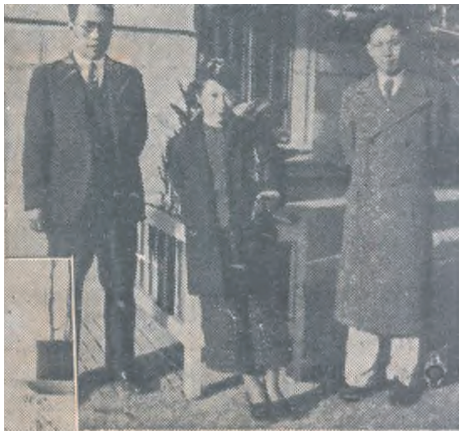

図３　林芙美子と雷熾（右）、陶志誠（左）

また、以下に述べる交流からも、往時の一面を知ることができるのではないだろうか。「北平之秋」の掲載号[43]には、写真（図３）が掲示されている。キャプションには「日本女性作家の林芙美子が来京旅行中、本社の記者と一緒に撮った写真。中央に林芙美子、右は雷熾、左は陶志誠。田英魁撮。」とある。雷熾と陶志誠の名は、林芙美子の「北平通信」「日記」などにおいても見受けられる[44]。たとえば「日記」には「西原夫人来訪、北京の新聞記者[45]雷熾君来訪。」（二三四頁）と示されており、林芙美子の家に雷熾が来て交流を重ねていたことがわかる。先行研究において、林芙美子と雷熾、陶志誠との交流は言及されていない。しかし、先述のとおり

林芙美子は三七年一二月の南京陥落に際して上海と南京へ赴いている。開戦をまたぐ交流のありようを今後調査することで、少なくとも林芙美子が往時の状況をどう捉えていたのかを見出すことに繋がるだろう。

四　戦時下の翻訳状況

一九三七年七月に開戦後、雑誌に訳作が多く掲載されていった。まず三八年には『文摘戦時旬刊』に、林芙美子の南京派遣時の足取りを辿る「東戦場巡禮」が掲載された。また『明明』には、自叙伝とされる「文學的自敘傳」が掲載されたが、添えられた訳者の言葉には、「この文を訳す目的は、この女性作家がどのように成長してきたのか、どのような生活を送ってきたのかを、読者に伝えたいということばかりだ。」とあり、〈林芙美子〉という戦地に赴いた作家を紹介する目的で掲載されたことは明白である。以後、雑誌の発行地に注目すると、下記のとおり上海と北京に集中して掲載された。

たとえば、林芙美子が内閣情報部のペン部隊の一員として一九三八年九月に上海や漢口などへ赴いたときのことをまとめた『戦線』（朝日新聞社、一九三八年一二月）と『北岸部隊』（中央公論社、一九三九年一月）も、三九年に入って以下の上海の雑誌に紹介されている。

『雑志』には、感傷的な叙述が含まれる「戰綫（特稿）」が掲載された。訳者の言葉には、「〔林芙美子は〕ファシズム軍人が戦うことを謳歌するような作品を書く立場であるが、この「戰綫」は感傷的な雰囲気を漂わせている。」などとある。また『上海婦女』には「支那人」の死体が描写された「北岸部隊：一位日本女作家的隨軍日記」が掲載された。訳者の言葉には「女性作家にも、残酷な事に対して同情心がなくなることも」あるなどと示されている。こうした戦争に感傷的であり日本軍の残虐行為の描写を含む訳作が掲載された現象については、一九三七年一一月に陥落した上海の租界の一部が四一年まで日本の占領から免れていたことが要因と考えられる。

他方、北京をはじめとする日本占領地域においては、同じ三九年、『中國公論』の創刊号に日本人の生活をユーモアに描いた小説「雨天插話」が載り、『華南公論』には宥和的に侵略を進める日本が示された「河在靜靜地流」が掲載されている。

このように三九年には、発行地により相反する傾向のある訳作が見受けられたが、四〇年頃からは、抗日に繋がる死体などの残酷な描写がある訳作は見受けられなくなる。

さらには北京にくわえ、南京、武漢、広州などの日本占領地域で発行された媒体にも掲載されていった。たとえば四〇年に、南

京で発行された『國藝』に小説「就職」が掲載された。翌四一年一二月にはアジア太平洋戦争が勃発するが、武漢で発行された『新婦女月刊』に小説「夫婦」と「初雷」がともに連載されるなどした。「夫婦」「初雷」には直接戦争にかかわる描写は見受けられず、この時期における小説の連載は、ひとつに日本文学の称揚が意図されたと推測できる。

一九四二年には、日本の国策推進のために日本文学報国会より林房雄や小林秀雄が北京に派遣されて大東亜文学者大会が開催されたが[46]、この年は最も翻訳点数が増えて十一点を数える。たとえば『東亞聯盟』の合併号において「林芙美子特輯」が組まれた。特集では、小説「女僕的遭遇」とエッセー「商人和農夫」と自伝的作品「我的文學生活」といったように、ジャンルを考慮した三作品が掲載された。これらの作品には時局に関する描写はないが、日本に親近感を抱かせるなどの政治的な意味合いを含んで翻訳・紹介されたことは、掲載誌の性質から明白である。

また、日本占領下の北京において「日本文学の翻訳は、短編以外に、大多数が全訳ではない」ことがあったという[47]。たしかに林芙美子の場合においても短編か抄訳であった。そのなかでも『立言畫刊』に掲載された「巴黎的追憶」は、原作である「巴里の思ひ出」から抽出して翻訳連載された[48]。訳者の言葉では、林芙美子を権威ある雑誌『改造』に執筆する文学者だと強調しているが、同誌においては、同じ訳者によって「旋律下的巴黎」が六回にわたり連載された。「旋律下的巴黎」の原作を特定できなかったが、本文には「中国式の下女が奥様に変身することも実現する時が来るだろう」（二一九期）や「天国に特有の宦官と同じように、下女たちに特殊な地位を与えるだろう」（二二二期）といった表現が見られることから、中国の人を意識したものであったといえる。ただし、こうした表現は翻訳上のストラテジーか、あるいは「翻訳」自体が創作であった可能性などを考慮して吟味する必要がある。

この四二年をピークとして翻訳点数は減少するが、『婦女雑志』には本論の冒頭で示した「日本女性作家作品特輯」が四三年に組まれた。特集では「作者紹介」も示されている。ここでは林芙美子が「現に日本女性作家の中で最も名望のある作家で、われわれもその名を知っている。」などと評価されている。そして、「事変前に中国を遊歴した〔略〕事変後および大東亜戦争が勃発して以来、数度中国ならびに南方戦線に従軍作家として赴いた。」とあり、中国や時局とのかかわりが特徴の一つであるとされている。対して他の作家における「作者紹介」から見出せる時局とのかかわりは、佐多稲子が「南方戦線に従軍した」と紹介されているに過ぎない。また、この特集の冒頭に示されている編者の言葉には、「事変から大東亜戦争にいたるまでのこの時期、日本の女性作家たちは、多

くが筆を携えて従軍し、広い前方戦場で活躍している。または後方で生産戦線に参加し、身命をあげて戦時報道と文化の諸任務を尽くしている。そのような勇敢かつ健闘的な、国家民族のために献身する精神は、男性作家に少しも劣っていない。[49]」などとある。林芙美子は戦争に献身的に活動する女性作家の一人とされていたことがわかる。

これを反映するかのように一九四三年には、『新東方雑志』に「蘇門答臘：〝西風之島〟〝黄木之島〟這南國的名字！（待續）」が紹介されたが、原作「スマトラ――西風の島」は、林芙美子が四二年に陸軍省報道部より南方へ派遣されたときのことを示した紀行文である。その他、同年には『太平』に小説「大學生」が載り、『中國文藝』に小説「勿忘草」が掲載された。

翌四四年以降は、『敦隣』に小説「肥皂」と「林芙美子歐行日記抄摘譯」が同じ訳者によって新たに翻訳されてはいるが、この頃から転載や同じ原作の翻訳作品が増えている。そのなかで、『新生』に「中國印象記」が掲載されたが、これは四〇年に中国語で発表された「中國之旅」と本文が同じである。ただし「中國印象記」では小見出し六点、「到中國去」「當鋪煤場」「中國美女」「山河雄壯」「萬里長城」「梅蘭芳」が付されている。同作には、林芙美子が三六年に北京へ赴いたときに見た人々の暮らしなども綴られている。

以上、戦時下における林芙美子の翻訳状況を見てきた。完全な占領を免れていた時期の上海を発行地とする雑誌に掲載された作品のような、戦争に感傷的であり抗日を促す描写があるものはわずかであった。多くは日本占領地域発行の媒体に掲載され、侵略への理解や日本文学の称揚、日本人に親近感をもたせようとする要素のある作品であった。翻訳作品を大きく分類すると、小説は十四編であるのに対して、身辺や体験に材をとったエッセーや戦記、ルポ類は二十二編あり小説よりも一・五倍ほど多い。[50]これは従軍作家であった林芙美子作品のひとつの特徴であるといえるだろう。

五　まとめ

本論では、中国における林芙美子の翻訳状況を見てきた。これにより戦前・戦時における翻訳作品、翻訳者や編集者との交流、年譜的事項の補訂すべき点が具体化した。

林芙美子の作品は、一九三一年に崔萬秋訳の「放浪記」を皮切りに次第に中国で訳され、読まれるようになった。三〇年代前半においては短編だけにとどまったが、三六年は、〈林芙美子〉という人を紹介する自伝的作品が見受けられた一方で、翻訳小説の連載も確認できた。三六年は、人と作品の両方の受容が目指されて

おり、ターニングポイントの年であった。全面戦争開始後、小説よりもルポや自叙伝等の作品が多く認められた。これはひとつに、前節で見たように時局に連動しての翻訳・紹介であったからだといえ、掲載媒体の発行地も作品の傾向に影響していた。

そして翻訳状況の解明に加えて、「放浪記」訳を通じた林芙美子と崔萬秋、曾今可との交流も具体的に明らかとなった。三人が力を合わせて出版に漕ぎつけた、三二年の中国語版『放浪記』がその証しである。先行論では魯迅、周作人、田漢らとの交流は指摘されてきたが[51]、本論において三〇年代前半における日中文人交流史を垣間見る一事例を提示することができた。

また、今回の調査で確認した全集未収録の「北平之秋」は、従来確証が取れなかった、林芙美子が改造社の嘱託で北京に訪問したことを裏付けるものであり、本論で言及した北京滞在期間を含め、年譜的事項を検証する必要性が明らかになった。さらに「北平之秋」掲載誌には、林芙美子を中央にして右に雷織、左に陶志誠といった北京滞在時の写真も見受けられた。今後、知られてこなかった三人の交流を追うことで、少なくとも全面戦争開始前後の三六年から三七年における林芙美子や往時の状況を解明することができる。

註

（1）今川英子編「年譜」『林芙美子全集　第一六巻』（文泉堂出版、一九七七年四月）には、「印税で上州湯ノ沢へ行き、［略］念願の中国大陸、満州、上海旅行に単独で出発」（二九二頁）などとある。

（2）王勁松「侵華文學中的〝他者〟和日本女作家的戰爭觀：以林芙美子〝運命之旅〟爲例［侵華文学中における「他者」と日本女作家の戦争観――林芙美子の「運命之旅」を例にして］」『重慶大学学報（社会科学版）』第一四巻第四号（二〇〇八年）。

（3）鄒双双「日本占領期（1937―1945年）の北京における日本文学の翻訳」『東アジア文化交渉研究』一〇号（二〇一七年三月）、二二五―二三五頁。

（4）最終確認は二〇一九年七月三日。なお雑誌によっては欠号も見受けられた。

（5）王向遠『日本文學漢譯史』（寧夏人民出版社、二〇〇七年）には、「『放浪記』大光書店、一九三七年」と示されているが、同書の存在を確認できなかったため、「翻訳作品一覧表」からは省いた。そのため本稿においては同書を除いた点数を明示している。

（6）二〇一七年一一月から二〇一九年七月三日までの間に、「全國報刊索引」と「大成老舊刊全文數據庫」を用いて調査した。雑誌によっては欠号が見受けられたため、五十三点は本稿執筆時点（二〇一九年七月）での結果である。また五十三点は、連載回数を含めた点数である。

（7）「抛棄」（沈端先訳、『新流月報』一九二九年第一期）と「在施醫室裡」（沈端先訳、『新流月報』一九二九年第二期）、「毆打」（勺水訳、『樂羣』一九二九年第一巻第二期）、「小貨攤兒」（岂遥訳、『創進』一九三七年新一第七期）、「嘲諷」（任鈞訳、『文藝先鋒』一九四五年第九巻第三／四期）。

（8）「煙草工廠」（伯修訳、『新流月報』一九二九年第二期）、「食堂底飯」（竹舟訳、『文學雜志』一九三三年第一巻第二期）、「決心」（紺弩訳、『作品』

一九三四年第一期）、「女兒」（居頓訳、『戰旗』一九四〇年第八九／九〇期）、「插話」（鐘清訳、『婦女雜志』一九四三年第四巻第一〇期）、「鴿」（許竹園訳、『太平』一九四三年第二巻第七／八期）。

（9）岡本かの子は「佛教文學提倡上的幾點困難」（祇林訳、『人海燈』一九三七年第四巻第二期）と「期待」（秦无度訳、『婦女雜志』一九四三年第四巻第一〇期）、中本たか子は「隨筆兩篇（「燒傷」「某村落風景」）」（季曉森訳、『婦女雜志』一九四三年第四巻第一〇期）。

（10）板垣直子『婦人作家評伝』（日本図書センター、一九九二年）、八三頁。

（11）板垣直子「新興女流作家」『女人藝術』三巻九号、（一九三〇年九月一日）、九七頁。

（12）「編後記」『婦女雜志』第五巻第一〇期（一九四四年一一月一日）、四八頁。

（13）崔萬秋「放浪記譯序」（『放浪記』上海：新時代書局、一九三二年）、二頁。

（14）崔萬秋「小引」（『放浪記』上海：啓明書局、一九三九年）、二頁。

（15）崔萬秋「日本女作家訪問記」『新時代月刊』一九三二年第三巻第一期、一八八―一九七頁。

（16）崔萬秋「東京交游記」『新時代月刊』一九三三年第四巻第四／五期、三四―四九頁。

（17）例えば、武者小路実篤の『母與子』（上海：真善美書店、一九二八年）、『武者小路実篤劇曲集』（上海：中華書局、一九二九年）、『忠厚老實人』（上海：真善美書店、一九三〇年）、『孤獨之魂』（上海：中華書局、一九三一年）があり、夏目漱石の『草枕』（上海：真善美書店、一九二九年）もある。

（18）データベース「国立国会図書館サーチ」（NDL Search）と「CiNii Books」によると、二〇一九年八月の時点で、日本国内における一九三二年版『放浪記』の所蔵情報は認められなかった。また翻刻の「／」は折り返しを意味する。なお「旅して／ゐますやも」の部分「して／ゐます」は推定である。

（19）崔萬秋「放浪記譯序」註（13）前掲書、一―二頁。

（20）崔萬秋「「放浪記」のことなど」『文藝』八巻九号（一九五一年九月）、二四頁。

（21）崔萬秋「日本女作家訪問記」註（15）前掲書、一九一頁。

（22）崔萬秋「「放浪記」のことなど」註（20）前掲書、二五頁。

（23）「林芙美子手扎」『新時代』一九三三年第三巻第五／六期、六頁。また、同じ『新時代』という誌名で本文も中国語である媒体を「CiNii Books」で確認したが（http://ci.nii.ac.jp/ncid/AA11563805）、二〇一九年八月時点の検索画面には「出版者不明」などと表示されており、日本国内に該当号が所蔵されているかは不明。また翻刻の「うれしゆうございました。」の部分の「ござ」は推定である。なお「／」は改行を意味する。

（24）曾今可「無恥的從軍部隊」『前線日報』第七版、一九三九年一一月六日付。

（25）洛神「崔萬秋一度狂捧日女作家林芙美子將餓死！〔崔萬秋が一時持ち上げていた日本人女性作家林芙美子が餓死に瀕す〕」『海風』一九四六年第一六期第一〇版。

（26）『東方雜誌』一九三一年一一月第二八巻第二一号、一〇四頁。

（27）『讀書雜誌』一九三一年第一巻第一期。朱雲影は「中條」「佐々木房子」「窪川」と表記しているが、本稿では「中条」「ささきふさ」「佐多」と表示した。

（28）『女聲』一九三四年第三巻第四期、五―六頁。「窪川」と表記されているが、本稿では「佐多」で統一している（以下同じ）。

（29）『申報』一九三六年二月八日付。

（30）『東方雜志』一九三六年六月第三三巻第一一号。

（31）「北平」表記も使われているが、本稿では「北京」表記に統一する。

（32）「文学的短論」とは、『文学的断章』（河出書房、一九三六年四月）のことか。

（33）「古都雜寫：北平之秋」『實報半月刊』一九三六年第二巻第一期、一九四頁。

(34) 今川英子編「年譜」註（1）前掲書、二九八頁
(35) 曾婷婷「越境と桎梏のはざまで――詩論林芙美子「うき草」」『浮雲』八号（二〇一六年一一月）、四頁。また曾によると北京には二十日間ほど滞在したという。
(36) 『大衆知識』（一九三六年第一巻第三期一一月二〇日）に発表され、『文摘』（一九三七年第一巻第一期）に部分転載された。なお徐芳について林芙美子は、「北平の女」『ホーム・ライフ』三巻一号（一九三七年一月）に「女子大学生」と記しているが、この頃徐芳は北京大学文学研究所のアシスタントを経て『歌謡周刊』の編集をしたりしていた。
(37) 『改造』の同号には西安事件をテーマとする企画も組まれている。これには、改造社の山本実彦も執筆者として参加し、抗日を要求した張学良を「あんな残虐な行為をする野蛮人」と激しく非難している。
(38) 「北京紀行」が『改造』に発表された一九三七年一月には、大阪毎日新聞社発行の『ホーム・ライフ』に林芙美子の「北平の女」が発表された。改造社と大阪毎日新聞社は、揃って作品を掲載している。
(39) 南京陥落後に林芙美子と改造社の山本実彦は、「日華連絡船上海丸」に同船して現地へ向かったが（「お客満載の上海丸」『東京朝日新聞』一九三七年一二月二八日付）、林芙美子の上海と南京行きは毎日新聞社の特派員としてなされた。帰国後、林芙美子はそれを題材にした小説「黄鶴」を『改造』二〇巻三号（一九三八年三月）に発表した。そのため、林芙美子が戦争協力にいたる要素として、改造社とのかかわり方が重要であったといえ、「年譜」の「自費」を考察する必要が生じてくる。
(40) 写真は林芙美子一人で写ったもの。「北京飯店裏　林芙美子女士訪問記」には、「最後別れる時に、入口でこの写真を撮ってあげた。写真からも彼女は小柄で愛嬌のある、よく考える東洋女性とわかる。」とある。
(41) 「北平之秋」と同じタイトルが見られるのは、この時点で陶志誠訳「北平之秋」が発表されていなかったからだと考えられる。
(42) 資料の存在自体は、山下聖美「林芙美子における台湾、中国、満州、朝鮮――基礎資料の提示と今後の研究課題」『日本大学芸術学部紀要』五六号（二〇一二年）に提示されているが、考察対象として取り上げられてこなかった。
(43) 『實報半月刊』（一九三六年第二巻第一期）の所蔵は、「国立国会図書館サーチ」と「CiNii Books」の二〇一九年八月時点の検索結果の画面には確認できなかった。
(44) 雷熾の名は、「日記」（『田舎がへり』改造社、一九三七年四月、二三四頁）と、「周作人氏へ」（『文藝』九巻五号、一九四一年五月、八八頁）などに認められる。陶志誠の名は、「北平通信」（『田舎がへり』、一五八頁）と、「北支那の憶ひ出」（『私の昆虫記』改造社、一九三八年七月、七六頁）、『一人の生涯』（創元社、一九四〇年一月、二七六頁）などに確認できる。
(45) 雷熾は『華北日報』の記者であったと考えられる。というのは、「北京飯店裏　林芙美子女士訪問記」に掲載の林芙美子の写真は、「北平之秋」に掲載された写真と同一のものであり、また「北京飯店裏　林芙美子女士訪問記」の文中には陶志誠の名前も認められるからである。
(46) 鄒双双「日本占領期（1937―1945年）の北京における日本文学の翻訳」註（3）前掲書、二二七頁。
(47) 銭稻孫『庸報』一九四二年一一月五日付より。
(48) 詳細は「翻訳作品一覧表」を参照されたい。
(49) 「日本女性作家作品特輯」『婦女雑志』一九四三年第四巻第一〇期、二〇頁。
(50) 一九三七年から四五年代の翻訳作品を、「訳者の言葉」などを参照しながら分類すると以下のとおりになる。小説は「雨天插話」「河在靜靜地流」「就職」「夫婦（待續～二）」「初雷（未完～續）」（＊計三回連載）「女僕的遭遇」「運命之旅」「大學生」「勿忘草」「肥皂」「就職」の計十四編。身辺に材を取った自叙伝、戦記、ルポ類は「事變的回憶」「東戰場巡禮」「文

學的自敘傳」「北岸部隊：一位日本女作家的隨軍日記」「戰綫（特稿）」「給周作人氏：好久不見了」「隨軍日記」「商人和農夫」「我的文學生活」「巴黎的追憶（一～二）」「旋律下的巴黎（一～五）」（＊計六回連載）「蘇門答臘：〝西風之島〟〝黄木之島〟這南國的名字！（待續）」「我的自傳」「放浪記」「中國印象記」「林芙美子歐行日記抄摘譯」の計二十二編。なお以上の点数は連載回数を含めたものである。また「放浪記」について、本稿では身辺に材をとった創作として捉えている。

（51）林敏潔「林芙美子與魯迅、周作人交往考」『中國現代文學研究叢刊』二〇一二年第一一期。

付記：本稿は「中央高校基本科研業務費 中山大學青年教師培育項目」の成果の一部です。

●翻訳作品一覧表

一、雑誌掲載の訳文

「大成老舊刊全文數據庫」より

訳文 タイトル	訳者	掲載誌 発行地	備考 （特記事項、書誌的事項等）	原作 タイトル	掲載誌	備考 （作品内容、書誌的事項等）
小的花	高明	萬象 （上海） 1934年第1期	同号の翻訳は、林芙美子作品のみ。『萬象』は不定期発行の文芸誌。	小さい花	新潮 30巻9号 1933年9月	女主人公由が、「因ノ島」のうどん屋に3週間女中奉公したときに出会った、ひな子等との交流から見えてくる島の生活や、由の「ひどく淋しい」日々が描かれている。
達凱愛爾路	黄源	文學季刊（北京） 1935年第2巻第1期	『文學季刊』は鄭振鐸主編の文芸誌。 ＊「全國報刊索引」と重複作品。	ルウ・ダゲエル （★）	若草 10巻1号 1934年1月	女主人公〈私〉が「巴里でも細民の住む」ダゲエルで出会った、貧しい女学生ロンヌとの交流などが描かれている。
一堆垃圾	萬家文	時事類編（上海） 1936年第4巻第17期	1935年の『文藝年鑑』を参照して訳したとの付記あり。同号の翻訳は、林芙美子作品のみ掲載。＊「全國報刊索引」と重複作品。	塵溜	文藝 2巻4号 1934年4月号	女主人公小なつが、別れた宮内の田舎の家に夫の治作と行き、世は「何も彼もまるで吹き寄せられた塵のやう」と思うに至ることが示される。
雨天插話	紀生	中國公論（北京） 1939年第1巻第1期	「雨天插話」掲載誌は創刊号。同号の翻訳は林芙美子作品のみ。また訳者の「紀生」は方紀生のこと。	雨の日の挿話	婦女界 48巻5号付録 1933年11月	主人公秀雄が、昔の良人に追いかけられているという同じアパートの7号室の女を助けるも、女を「不思議」だと思うことが描かれている。
事變的回憶	訳者名の記載なし	時興潮（重慶） 1939年第4巻第4期	タイトルの次行に「大陸八月号—東京」とあり。原作「事変の想ひ出」の約7割が訳されている。翻訳の掲載は林芙美子のみ。	事変の想ひ出	大陸 2巻8号 1939年8月	エッセー。2周年を迎えた「事変」についての不安が記されたり、「事変」を「戦争」と呼ばないことへの疑問等が呈されたりしている。

「全國報刊索引」より

訳文 タイトル	訳者	掲載誌 発行地	備考 （特記事項、書誌的事項等）	原作 タイトル	掲載誌 （収録先）	備考 （作品内容、書誌的事項等）
放浪者的隨筆	崔萬秋	橄欖月刊 （南京） 1931年第15期	翻訳内容については、原作の「赤いスリツパ」と「女アパツシユ」等に見られる、男性等に対する不満を表出した短文が選訳された傾向が見出せる。なお『橄欖月刊』は1930年創刊の文芸誌。	赤いスリツパ —放浪記—	女人藝術 （巻号記載なし） 1929年4月号	•「赤いスリツパ」には、〈私〉が一緒に暮らしていた男と別れたあとの心情や、画学生の吉田さんとのことなどが描かれている。
				女アパツシユ —放浪記— 等	女人藝術 3巻10号 1930年10月 等	•「女アパツシユ」には、〈私〉が川端画塾横のアパートに転居して出会った女学生とパパ、松田さんのことなどが描かれている。

女流氓：放浪記	崔萬秋	橄欖月刊 1931年16期刊	初出の『女人藝術』は発禁になったが、翻訳に採用されたのは『続放浪記』所収の本文ではなく、初出の本文であると、異同箇所（「絵は好きなんですよ」「焦心、生きるは五十年」）の訳文より推定できる。	女アパツシユ ―放浪記―	女人藝術 3巻10号 1930年10月	＊前出作品。「女アパツシユ―放浪記―」が掲載された翌月号の「編集後記」によれば、「女アパツシユ」掲載号は発禁に遭っている。なお「女アパツシユ」は、『続放浪記』（改造社、1930年11月）に収録された。
林芙美子的自傳	崔萬秋	新時代 （上海） 1931年第1巻第2期	『新時代』は曾今可編集の文芸月刊誌。曾今可と林芙美子、訳者の崔萬秋との翻訳を通じた交流については本稿を参照されたい。	九州炭坑街放浪記	改造 11巻10号 1929年10月	家を出た母と〈私〉、そして義父が炭坑街の直方を行商したりする中で出会う人との交流や、生活が描かれている。なお『続放浪記』収録時のタイトルは「放浪記以前―序にかへて―」。
八山旅館	崔萬秋	新時代 1931年第1巻第4期	同上	八ツ山ホテル	続放浪記 改造社 1930年11月	「白樺のしをり描き」をしている林さんとベニとパパ等のやり取りが描かれている。ベニが怪しい男につかまったり、パパが詐欺横領罪で引っぱられたりして、ベニが金沢へ帰ることに。
淫賣婦與飯店	崔萬秋	現代文學評論 （上海） 1931年第2巻第1/2期	訳文の最後に「一三九〇年十一月二十三日訳」と示されているが、「一三九〇」は誤植で正しくは「一九三〇」だと考えられる。なお『現代文學評論』は文芸誌。	淫売婦と飯屋 ―放浪記―	女人藝術 3巻6号 1930年6月	女中をお払い箱になった〈私〉の宿泊先の部屋に突然来た女や、飯屋にいた〈私〉に金をせびる労働者等のことが描かれた後、〈私〉が職業紹介所で仕事を探す様子が描出される。
紅的拖鞋	崔萬秋	現代文學評論 1931年第2巻第1/2期	訳者後記に「それほど重要ではない箇所を略した。」とあるとおり、古本屋や五十里さんのことなどは省かれている。また翻訳に採用された原文は、異同（「夏影色」等）より『女人藝術』掲載本文だと推定できる。	赤いスリツパ ―放浪記―	女人藝術 （巻号記載なし） 1929年4月号	＊前出作品。 同作は『女人藝術』に発表後、『放浪記』（改造社、1930年7月）に収録された。
夕餐	崔萬秋	小説 （上海） 1934年第7期	『小説』は創作の掲載を主とする文芸誌。	夕餉	サンデー毎日 1934年8月12日号	随想。平野零児と下村千秋、大宅壮一と群馬県の水上にキャンプへ行ったことが綴られている。林芙美子の写真あり。
小説：市立女學校（一）	訳者名の記載なし	太平洋月刊 （上海） 1936年第3巻第3期	『太平洋月刊』は1934年5月に創刊。	市立女学校	改造 18巻2号 1936年2月	海辺の町の市立女学校をあと4、5週間で卒業する生徒の学校生活が描かれている。理科の試験や作法の時間、進級に向けての国語の課外授業などが、私生児の垣島さわを中心に示される。

小説：市立女學校（二）	同上	太平洋月刊 1936年第3卷第4期	同上	同上	同上	運動会の練習をする体操の時間でのことや、風紀についての言い争い、あるいは修学旅行に関することや、級友の噂話、裕福な生徒のことなどがさわの目を通して描かれる。
小説：市立女學校（三）	同上	太平洋月刊 1936年第3卷第5期	同上	同上	同上	修学旅行に行きたかったさわと、居残りの生徒小畑きみ子が、教師仁科徳平の寄宿先に遊びに行ったときに、女学校の寄宿舎が火事になるが大事には至らなかったことが綴られている。
小説：市立女學校（四）	同上	太平洋月刊 1936年第3卷第6期	同上	同上	同上	居残りの大山のぶ江が、遊びに来たさわに教頭等の不品行な写真を見せる。その後、修学旅行中の教員の不始末などが示される。色々とある中、卒業式が近づいてくることが描出される。
故都雜寫：北平之秋	陶志誠	實報半月刊 （北京） 1936年第2卷第1期	訳文末に「志誠附記」と示されて「この文は、すなわち林氏が二十分で書きあげて、訳者に訳させたのだ。」などとある。詳細は本稿を参照されたい。	日本で発行された掲載誌は未確認	同左	訳文には、北平に来て「まだ十日も経っていない」ときに見た秋の景色の素晴らしさについて示され、「東亜の文化城」の北京で文化界の人と会談したいといった抱負が叙述されている。
林芙美子的自傳	斐琴	人間世 （上海） 1936年新第2期	「林芙美子的自傳」の原作「文学的自叙伝」は、1944年に発表される訳文「我的自傳」（『婦女雜志』）の原作にもなる。なお『人間世』は林語堂主編の文芸誌。	文学的自叙伝	新潮 32巻8号 1935年8月	〈私〉が両親と「尾の道」に7年ほど移り住んだときに通学した女学校での文学体験と、上京後の生活状況や文学的出発、巴里行きや倫敦滞在時の文学体験が叙述されたりしている。
我的二十歳時代	白萊	東流 1936年第2卷第4期	原作「私の二十歳」の後半部分「何にならうかとも、何をしようかとも」から「作家にならうなぞとは夢にも思はなかつたのです。」が訳された。『東流』は文芸誌。	私の二十歳	月刊文章 1巻4号 1935年6月	エッセー。生活が大変であった20歳の頃につけていた日記に関してや、慰められた読書について示され、この頃は孤独で将来について深く考えなかったということなどが叙述されている。
東戰場巡禮	余士華	文摘戰時旬刊 （上海） 1938年第15期	原作の掲載誌について「現代三月號」との表示あり。なお『文摘』は1937年9月28日に『文摘戰時旬刊』に改名され、新たに1号から発行されるなど変動があった。	従軍通信	現代 19巻3号 1938年3月	第一信から第六信まで示され、上海から南京へ移動する様子や現地のありようなどについて叙述されている。甲板で撮影されたと見受けられる「長谷川司令長官と林女史」の写真あり。

文學的自敘傳	滕更	明明 （撫順） 1938年第2巻第4期	訳者の言葉に「この自叙伝は、改造社が昭和十二年九月十九日発行した『林芙美子選集』第三巻の「文学的自叙伝」に基づいて訳した。新潮社で昭和十一年五月二十五日に発行された『私の文壇生活を語る』の中の「私の履歴」も参考にした」などとある。なお『明明』は文芸誌。	文学的自叙伝	林芙美子選集 第三巻、改造社 1937年9月	「文学的自叙伝」は本一覧表前出作品。
				私の履歴	私の文壇生活を語る 新潮社 1936年5月	「私の履歴」は二部構成。まず「文学的自叙伝」が若干改稿されて組み込まれており、文末に「(十年七月)」と示されている。これ以降には、「いま、私の魂の糧ともまっている書物には、唐詩選、寒山詩」などと記されたりして、今後の仕事への意欲が綴られる。文末には「(十一年二月二十六日夜補筆)」とあり。
河在靜靜地流	謝茂辛	華南公論（広州）1939年第1巻第2期	訳文掲載誌『華南公論』は1939年に創刊し、「新東亜秩序」を鼓吹する立場にあった。	河は静かに流れゆく (★)	婦人公論 24巻9号 1939年9月	南京に住む女主人公潘（バン）が夫の朱（シユ）と生き別れになり、日本人に雇われて息子の何（ホウ）とともに生きるが、朱を探しに行く話。
北岸部隊―一位日本女作家的隨軍日記	青紗帳	上海婦女 （上海） 1939年第2巻第7期	冒頭で訳者が「原文は九月十九日から十月二十八日まで、一日も怠らずに書いた日記である。計十一万字ぐらい。〔略〕掲載したのは選訳」などと示している。『北岸部隊』の117頁～126頁8行目までが訳された。	北岸部隊「十月十九日　晴」の部分	北岸部隊 中央公論社 1939年1月	日記形式の従軍記。 〈私〉が起床してから出発するまでの身支度や、進軍中に河を渡る様子などが叙述される。また、「支那人」の死体なども描写されている。
戰綫（特稿）	哲非，巴侖	雜志 （上海） 1939年第4巻第2期	冒頭で訳者が「林芙美子の過去については早くも皆さんに周知されている。今の彼女は「銃後文人」の一人になった。（略）一部を選んで訳」したなどと示している。原文の『戦線』95頁8行目～107頁が訳された。	戦線「(十二信)」の途中から「(十三信)」まで	戦線 朝日新聞社 1938年12月	書簡体の従軍記。兵隊が妻に宛てた手紙のことや記者の様子、「支那兵」が間違って道をたずねに来たこと、「戦線」や行軍の様子などが示されている。〈私〉が日本にいる母へ呼びかけた感傷的な叙述もなされている。
就職	美彌	國藝 （南京） 1940年創刊號1月15日	掲載誌『國藝』は文芸誌で、創刊号の翻訳は林芙美子作品のみ。訳者の言葉に「『林芙美子短編集』の「葡萄岸畔」巻の「就職」に基づいて訳した」とあるが、これは右「備考」欄で提示した『葡萄の岸　下巻』のこと。	就職	婦人公論 24巻12号 1939年12月	女主人公埼子が好意を抱く健一や、その同級生が満州等での就職をひかえた「昏い」心情などが描かれている。本作は「葡萄の岸ノート」（『葡萄の岸　下巻』実業之日本社、1940年11月）に「好きな作品」と示されている。
給周作人氏：好久不見了	岳蓬	吾友（北京） 1941年第1巻第47期	『吾友』は総合誌。訳者の言葉に『文藝』5月号に基づいて訳したとあり。	周作人氏へ	文藝 9巻5号 1941年5月	「一大決心をして日本へ」来て欲しい周作人へ宛てた書簡体形式で、北京の大学のことや馮沅、謝冰瑩、魯迅、方紀生のことなどが示されている。

隨軍日記	魏都麗	日本評論（上海） 1941年第2巻第8期	「隨軍日記」は前出「北岸部隊」（『上海婦女』）と同じものだが、冒頭の「訳者の言葉」が省かれている。	北岸部隊「十月十九日　晴」の部分	北岸部隊 中央公論社 1939年1月	＊前出作品。
夫婦（待續）	曹彦	新婦女月刊 （武漢） 1941年第5期	『新婦女月刊』の同号には林芙美子作品の翻訳のみ掲載されている。原作「夫婦」（『婦人倶楽部』）の548頁6行目までが訳された。	夫婦 （★）	婦人倶楽部 15巻6号 1934年6月	妻帯者の啓二が、見知らぬ人妻の女性と親しくなりその女性の家へ行き、妻の地味な生活についての不平を話し出すことが描出されている。
夫婦（二）	曹彦	新婦女月刊 1941年第6期	訳文末に「一九四一年三月十七日訳了」と示されている。	同上	同上	啓二は再び人妻の家へ行き今度は宿泊までするが、それを知った妻が置手紙をして実家へ戻り、夫婦が互いを思い遣る大切さが示される。
初雷（未完）	曹彦	新婦女月刊 1941年第7期	掲載誌『新婦女月刊』は婦人雑誌。	初雷	牡蠣 改造社 1935年9月	修吉の妻である縫子は、修吉の亡くなった前妻興志子の友人であったということや、縫子が興志子の子供と馴染めない様子が綴られている。
初雷（續）	曹彦	新婦女月刊 1941年第8期	同上	同上	同上	修吉と縫子が結婚する前、興志子が二人に裏切られていくさまが描かれている。修吉と縫子の逢瀬や、興志子と子供の転居が示されている。
初雷（續）	曹彦	新婦女月刊 1941年第9期	訳文の文末に「（未完）」と示されているとおり、原作「初雷」の最後まで訳されずに掲載されている。	同上	同上	病死した興志子の死水を子供が一人でとったことやその後の修吉と縫子のこと、子供の部屋に興志子の写真が貼ってあることが示される。
女僕的遭遇	岳蓬	東亞聯盟 （北京） 1942年第4/5期 「林芙美子特輯」	完訳されずに全体の9割ほどが『東亞聯盟』に掲載されている。	葡萄の岸	日本評論 10巻10号 1935年10月	都会の裕福な吉澤寛三の家に初奉公する地方出身のよしゑが、寛三に遊ばれて次第に世の中や都会の暮らしに疑問を抱くことが示される。
商人和農夫	田星		『東亞聯盟』は東亜聯盟の機関紙。東亜聯盟の研究を名義に中日親善を宣揚した。なお南京と広州の東亜聯盟も同名誌を発行。	商人と百姓	報知新聞 1937年3月2日 ～3月4日	エッセー。田舎の信州へ帰ったときに、都会の生活に反駁心がおきたことが綴られている。商人や行商人の厳しい生活についても示される。
我的文學生活	丁敏		訳文末に「『林芙美子選集』第3巻「文学的自叙伝」より翻訳」と示されている。	私の文学生活	改造 19巻8号 1937年8月	自伝的作品。再訪したい巴里のことや子供の頃に過ごした九州や尾道のこと、上京時や旅のことなどを述懐し、仕事への意欲が示されている。

巴黎的追憶	肇源	立言畫刊 （北京） 1942年第211期	同号には林芙美子作品のみ掲載されている。「巴黎的追憶」は「世界知識」欄に掲載された。また訳文は、原作を部分的に抽出して意訳されたと推定できる。	巴里の思ひ出、部分	改造時局版8 22巻13号 1940年7月	原作を抽出して意訳されたと考えられるため、原作全体の内容はまとめて以下に記しておく。 26歳の〈私〉が巴里の14区に暮らしたときの物価や日常品のことが示され、巴里と日本人の生活が比較されたりしている。また、フランス人とドイツ人についてや、巴里の美術品や風景、古い街路などについても叙述されている。
巴黎的追憶	肇源	立言畫刊 1942年第212期	訳文末に訳者の言葉として、「改造十三号による。〔略〕原著の素晴らしい章節を訳して読者の皆さんに饗する」などとあり。	同上	同上	
旋律下的巴黎 一：流浪者的寄宿舎	肇源	立言畫刊 1942年第218期	『立言畫刊』は週刊娯楽画報誌。1938年10月1日から1945年8月に発行された。「旋律下的巴黎」は「世界知識」欄に掲載。	日本で発行された掲載誌は未確認	同左	訳文に、パリに失業者が多いこと、「パリ政府が戦後、失業者に救済機構」で援助したことに関するエピソードが示されたりしているが、対応する日本語作品は不明。
旋律下的巴黎 二：奴隷女僕的豪語	肇源	立言畫刊 1942年第219期	同上	同上	同上	訳文に、「パリの下層社会の悲劇である下女」が言及され、西洋が変われば中国式の下女も奥様に変わるだろうなどと示されているが、対応する日本語作品は不明。
旋律下的巴黎 三：紅塵内的可憐蟲	肇源	立言畫刊 1942年第220期	同上	同上	同上	訳文に、フランスの女性淫売のことや、中国人がフランスの酒と夫人を賛嘆するのは、フランス社会の裏面を知らなかったからだということなどが示されているが対応する作品は不明。
旋律下的巴黎 綺麗小姐的靈魂	肇源	立言畫刊 1942年第221期	訳文末に「（未完）」とあり。	同上	同上	訳文に、娼妓「綺麗」の生活と仕事ぶりなどが描かれているが、これに対応する作品は不明。
旋律下的巴黎 綺麗小姐的靈魂	肇源	立言畫刊 1942年第222期	同上	同上	同上	訳文に、「綺麗」が弱り、つい亡くなり、教会で神父に祈祷されたことや、天国で皇后と貴姫の「下女」となり「太監」と同じように特殊な地位も与えられるだろうといったことが示されているが、対応する作品は不明。
旋律下的巴黎 五：汽車女郎的迷惘	肇源	立言畫刊 1942年第223期	同上	同上	同上	訳文に、「綺麗と菲芳」の同業者の狡猾さや、「美人の罠」にひっかかった男性の遭遇について叙述されているが、これに対応する作品は不明。
運命之旅	金戈	婦女雑志 （北京） 1943年第4巻第10期	「日本女作家作品特輯」に掲載された。紹介として「林芙美子が中国戦線から帰国した後に書いた作品で、題材は中国の土地と人であるが、日本人作家の戦争に対する理念と精神をも表している。」などとあり。	運命の旅	日の出 11巻8号 1942年8月	日本軍が攻めてきて四襟と夫の黄土が山に逃げるも空襲があり、次いで非難した南京の街は火事が広がっていた。湖南と四川の兵隊を非難し、日本兵を賛美する描写がなされながら、黄土がたくましく生きる様子が描かれている。

蘇門答臘：“西風之島”“黄木之島”這南國的名字！（待續）	明模	新東方雑志（上海） 1943年第8巻第2期	『新東方雑志』は汪政権の総合誌。原作は連載（上下）されたが、「蘇門答臘」では第一回目のみ訳されている。サブタイトルに見受けられる“黄木之島”は、原文に「黄木の島」と示されている。	スマトラ ―西風の島―	改造 25巻6号 1943年6月	南へ来て約半年になる〈私〉が、目にした南方を提示したりしながら、スマトラを横断する。パレンバンや、日本語を教える瑞穂学園、ゴム園、便所、河などが叙述されている。
大學生	許竹園	太平（太平月刊畫報、上海） 1943年第1巻第5期	『太平』は『太平月刊畫報』とも言い、日本占領時期の上海で発行された総合画報誌。「大學生」は、横光利一、丹羽文雄、葉山嘉樹、火野葦平、佐多稲子等の訳作と共に同年、太平書局出版の章克標（許竹園）訳『現代日本小説選集』に収録されている。	大学生	婦人公論 24巻10号 1939年10月	大学卒業を来年にひかえた5人の大学生と、彼らが湯ヶ島で出会った娘の交流が描かれる。淡い感情もある中で、彼らが就職や兵隊としての出征に縛られていくありさまが示されている。
勿忘草	凌冰	中國文藝 （北京） 1943年第8巻第2期	掲載誌『中國文藝』は張深切などが編集。発行所を転々とし、中国文芸社や人々書店、華北文化書局と度々変更した。親日文芸誌。	勿忘草	少女の友 夏期増刊号 31巻10号 1938年8月	熊本の女学校に赴任した姉の与志子と、東京から姉に会いに来た妹国子が赤瀬でひと夏を過ごしたとき、同地で合宿中の女学生千代子の体調が急変し熊本で亡くなることが描かれている。
肥皂	岳蓬	敦鄰（北京） 1944年第2巻第5期	掲載誌『敦鄰』は汪政権よりの総合月刊誌。	石鹸	蜜蜂 創元社 1939年11月	京都へ行った〈私〉が今は亡き芸者道子のことを回想し、その妹だという菊代と墓参りに行ったり住む家を探したりして最後に石鹸を買う。
我的自傳	林□□ （「□□」は判読不可）	婦女雑志 （北京） 1944年第5巻第11期	1936年に発表された「林芙美子的自傳」と同じ。ただし「我的自傳」は、原文「日本の犀星氏、春夫氏も」以降を訳していない。	文学的自叙伝	新潮 32巻8号 1935年8月	＊前出作品。
就職	羅雅子	婦女雑志 1944年第5巻第11期	1940年に翻訳掲載された「就職」（『國藝』）と同じ作品。	就職	婦人公論 24巻12号 1939年12月	＊前出作品。
放浪記	凌冰	吾友（北京） 1944年第4巻第22期	＊前出作品だが、訳された箇所は原作「淫売婦と飯屋」の約4分の3以降にあたる。	淫売婦と飯屋 ―放浪記―	女人藝術 3巻6号 1930年6月号	＊前出作品。
中國印象記	湘文	新生 （広州） 1945年第2期	『新生』は総合誌。同号で女性作家の翻訳は林芙美子のみ。訳文には、原作に示されていない小見出しが、6点付されている。	中國之旅	華文大阪毎日 第4巻第1期 1940年1月1日	中国語のエッセー。結婚する前、中国の言葉に憧れ訪問したいと思っていたことや、杭州や蘇州、北京等を訪問したときの感慨が示される。

林芙美子歐行日記抄摘譯	岳蓬	敦鄰（北京）1945年第3巻第1期	『敦鄰』に掲載された訳文は、原作『憂愁日記』の190-193頁に該当する。	憂愁日記	憂愁日記 中央公論社 1939年11月	『憂愁日記』には、巴里に着いたときから帰国後のことが、日記形式で綴られている。該当箇所には、上海へ入港した際、内山書店へ行ったり魯迅に会ったりしたことなどが示されている。

付記：(1)「大成老舊刊全文數據庫」と「全國報刊索引」において重複する訳文掲載情報は、「大成老舊刊全文數據庫」の欄にのみ示した。
(2) 訳文掲載誌の発行地に「北平」表記も見受けられたが、本一覧表では「北京」に統一して示した。
(3) 原作の初出誌の調査にあたっては、『近代文学研究叢書　第69巻』（昭和女子大学近代文学研究室編、1995年3月）所収の平井法「二　著作年表」を基礎資料とし、浦野利喜子・久保卓哉「林芙美子全集に未収録の作品について　附資料　林芙美子全集（文泉堂出版）未収録作品リスト」『福山大学人間文化学部紀要』12巻（2012年3月）と山下聖美「林芙美子における台湾、中国、満州、朝鮮――基礎資料の提示と今後の研究課題」『日本大学芸術学部紀要』56号（2012年）を参照した。なお本一覧表の★印は、上記のリストに初出誌が明示されていなかった作品である。（本一覧表作成期間：2017年11月～2019年6月）
※一覧表作成後、廣畑研二編著『林芙美子全文業録　未完の放浪』（論創社、2019年6月28日）が発行されたが、★印の初出情報は提示されている。

二、訳書

タイトル	訳者	収録先（シリーズ名）	発行地、版元 発行年など	収録作品、特記事項など
牡蠣及其他	張建華	陸少懿，吳朗西主編 “現代日本文學叢刊”	右欄を参照されたい	『牡蠣及其他』は、1936年10月4日付『申報』（上海版）の「文化生活出版社新編叢書四種預告」において、「現代日本文学叢刊」の一書として紹介されている。しかし実物は確認できず、出版年や出版地、訳者、収録作品等から、下欄の『枯葉』に改題し出版されたと推定できる。
枯葉	張建華	現代日本文學叢刊80	上海：文化生活出版社 1937年5月（計213頁） 付録（197–213頁）「我的履歴」	収録作品は「愛哭的小鬼頭」「牡蠣」「枯葉」。また付録として「我的履歴」も収められているが、文末に「一九三六年二月十二日補記」と示されている。
放浪記	崔萬秋	新時代文藝叢書	上海：新時代書局 1932年1月（計140頁、19×14cm） 付録（123–140頁）：「林芙美子訪問記」	収録作品は、「放浪記以前」「失足女和飯店」「取消了目標」「紅的拖鞋」「女流氓」「八山旅館」。本書には林芙美子が崔萬秋に宛てた書簡等も付されている。また付録として「林芙美子訪問記」が収録されており、これには崔萬秋が訪日中に林芙美子を訪問したことが記されている。
放浪記：足本	崔萬秋	世界文學名著	上海：啓明書局 1937年2月（計72頁、19×13cm） 付録（64–72頁）：「林芙美子訪問記」	上海図書館の所蔵情報によれば、巻頭に「放浪記以前」があり巻末には「林芙美子訪問記」が収録されており、その他、「賣婬婦與飯館」「取消了目標」「紅的拖鞋」「女流氓」「八山旅館」の五篇が収められている。
放浪記	崔萬秋	世界文學名著	上海：啓明書局 1939年（計72頁、19×13cm） 付録（64–72頁）：「林芙美子訪問記」 ※1937年啓明書局版の再版。	実見した本書の「奥付」には、「中華民国二十六年二月初版　中華民国二十八年一月再版」とあるため、1937年版『放浪記』の再版であり、収録内容も同じであると考えられる。また本書のはじめに、崔万秋による「小引」（「序」）が示されており、文末には「崔萬秋記於上海，廿六年一月」と示されている。「小引」に続いて「放浪記以前（作者的自傳）」などが収録されている。 なお、王向遠『日本文學漢譯史』（寧夏人民出版社、2007年）では、本書の版元を「上海啓智書局1937, 1939」としているが、正しくは「啓明書局」である。

●訳文掲載誌の基本情報一覧表

掲載誌	基本情報
万象	1934年に創刊し、1935年第3期終刊した。不定期発行。図像豊富な文芸誌。
文學季刊	1934年1月1日に北京で創刊したが、華北事変を機に編集者や執筆者が抗日運動に身を投じたことによって1935年12月16日終刊、計8期。鄭振鐸、章靳以主編の文芸誌で、30年代中期において中国北部における最も影響力の強い大型文芸誌とされている。
時事類編	1933年8月に中山文化教育館上海で創刊、1942年1月1日に終刊した。1937年9月15日より『時事類編特刊』に改名される。中山文化教育館によって編集発行された。政論中心。
中國公論	1939年4月1日に北京で創刊し、1944年1月1日に終刊した、中国公論社発行の政治季刊誌。「国家建設の促進、国際問題の検討、東方文化の発揚、反共運動の強化」を趣旨とし、論述、訳述、文芸などの欄がある。
時輿潮	1943年3月15日に時輿潮社が重慶で創刊した。1946年5月15日に終刊。文芸誌。
橄欖月刊	1930年に創刊、1933年に終刊した。南京線路社発行の文芸誌[(1)]。
新時代	1931年8月1日に上海で創刊し、1934年2月1日の第6巻第2期をもって停刊する。1937年元日に復刊、同年4月1日の第7巻第4期をもって終刊。上海新時代書局発行、曾今可編集。包容力のある、活発な議論を許容する文芸月刊誌とされている。
現代文學評論	1931年4月10日に創刊し、同年10月20日に終刊、計7期。上海現代書局発行の文芸誌。「民族主義文芸運動」の同人らが創刊した文芸誌で、「民族主義文学」を宣揚し、中国プロレタリア文学を蔑む。
小說	1934年5月に上海で創刊。はじめは月刊だが第3期より隔週での発行となる。1935年3月1日第19期をもって終刊。梁得所主編、大衆出版社発行。翻訳もあるが、創作が主な文芸誌。大衆文芸の実験台になることを目指し、流派を問わず作品を掲載する方針。
太平洋月刊	1934年5月創刊。上海で発行。
實報半月刊	1935年10月に北京で創刊、1938年に終刊、計18期。「消息を報道、学術に貢献、文芸を紹介」を編集方針とする総合雑誌。
人間世	1934年4月5日に上海で創刊、1935年12月20日第42期をもって停刊とされているが、その後1936年新第1期、新第2期を発行する。上海良友図書印刷公司出版発行、林語堂主編の文芸誌。
東流	1934年8月1日に東京で創刊、1936年11月15日第3巻第2期をもって終刊、計14期。中国左翼作家聯盟東京分盟の機関紙であるが、東京東流文芸月刊社の名義を借りて編集、出版、発行。林煥平、陳達人が主編。寄稿者には魯迅、郭沫若がいる。創作のほか、外国文学作品や、流派、動態も積極的に紹介する文芸誌。
文摘	1937年1月1日に上海で創刊、月刊。復旦大学文摘社編集、黎明書局発行。日中戦争が勃発したため、同年9月28日「文摘戦時旬刊」に改名され、新たに1号から発行された。第16期から武漢に、第34期から重慶に移転。1945年12月に上海に戻り、もとの雑誌名「文摘」になった。文芸誌。
明明	1937年3月に撫順で「月刊満州社」の援助により創刊、1937年8月（第6期）より文芸誌となる。編集者も発行人も日本人になっているが、事実上編集に取り組んだのは古丁を筆頭とする中国人文学青年である。東北淪陥地区の文壇に大きな影響力を持つ。
華南公論	1939年創刊、華南文化協会総務部発行。抗日に反対し、「平和救国」「新東亜秩序」を鼓吹する立場で、中日両国の社会、政治、文化を紹介する。
上海婦女	1938年4月20日に創刊し、1940年6月1日に終刊。上海発行。主に各地の女性の抗日活動と世界各国の女性の動態を掲載したが、時事新聞や婦人伝記、作品なども紹介する。「時事」「訳著」「文藝園地」「名人伝記」などの欄がある。
雑志	1938年5月10日に創刊し、1945年8月に終刊、計89期、上海で発行された。その間、数度停刊し、復刊する。前期は転載を中心とする総合誌、後期は創作が主な文芸誌。
國藝	1940年1月に南京で創刊した。文芸月刊、中国文芸協会編集発行。東方固有文化の発揚を趣旨に文芸を研究する立場を取った。内容が幅広く、日本文学が多く紹介されている。協会の顧問に、奥宮正澄、西里龍夫、赤星篤光、柳町精、伊藤左右三郎などの名前が連なっており、「創刊献辞」には汪兆民の腹心である梁鴻志の言葉が載っている。
吾友	1940年12月21日に創刊し、1945年6月15日第5巻第11期をもって終刊。北京発行の総合誌。

日本評論	1932年7月に創刊し、1945年3月に終刊した。はじめは「日本評論三日刊」。日本研究会が東京で編集・出版した抗日雑誌だったが、1940年に上海へ移転して以降、親日雑誌へと変わる。
新婦女月刊	1940年12月から1941年7月に武漢で発行された月刊婦人誌。
東亞聯盟	1940年6月に北京で創刊、1945年1月に終刊した。中国東亜聯盟協会の機関紙で、東亜聯盟研究の名義で中日親善を宣揚。広州などの東亜聯盟も同名雑誌を発行していた。
立言畫刊	1938年10月1日から1945年8月に北京で発行された週刊娯楽画報誌。
婦女雑志	1940年9月に北京で創刊し、1945年7月に終刊。日本華北派遣軍報道部所属の武徳新聞社が発行出版した婦人誌。日本占領時期の北京において、最も長く発行された婦人誌。
新東方雑志	1940年3月に創刊し、1944年1月2日に終刊した。上海発行。汪政権の月刊総合誌。
太平	1942年8月に上海で創刊し、1944年8月第3巻第1期をもって終刊。太平画刊によって編集、発行された総合画報誌。表紙には「太平月刊畫報」とある。
中国文藝	1939年9月1日に北京で創刊し、1943年11月に終刊した。計51期。張深切など編集。中国文芸社、人々書店、華北文化書局といったように発行所を度々変更。親日文芸誌。
敦隣	1944年1月に華北善隣会が北京で創刊、1945年3月第3巻第2/3期をもって終刊。王真夫編。政治、文化などの論述や訳文を掲載し、「中日親善」「東亜共栄」を宣揚する汪政権よりの総合月刊誌。
新生	1945年6月に広州で創刊し、1945年8月第三期終刊。新生出版社出版の総合誌。

付記：・「翻訳作品一覧表」の掲載順に表示した。
・「北平」は「北京」表記に統一して示した。

註

(1)　伍傑主編『中文期刊大詞典（上下）』（北京：北京大學出版社、2000年）では上海発行とするが、正しくは南京発行である。

参考文献

中國社會科學院文學研究所編『中國現代文學期刊目録匯編』北京：知識産権出版社、2010年
吳俊、李今、劉曉麗、王彬彬主編『中國現代文學期刊目錄新編（上中下）』上海：上海人民出版社、2010年
伍傑主編『中文期刊大詞典（上下）』北京：北京大學出版社、2000年